



モーツァルト生誕250年記念
ザ・シンフォニエッタ 合志市演奏会



主催
ザ・シンフォニエッタ
共催
熊本モーツァルト協会
協力
ヴィーブル合唱団

後援
熊本県 熊本県教育委員会 合志市 合志市教育委員会 熊本日日新聞社
NHK熊本放送局 RKK TKU KKT KAB 熊本シティエフエム FMK

2006年11月19日(日)

<昼の部> 開場 13:00 開演 13:30

<夜の部> 開場 17:30 開演 18:00

合志市総合センター”ヴィーブル”文化会館

Program

モーツァルト作曲

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 K.527

ピアノ協奏曲第20番ニ短調 K.466

～ 休憩 ～

交響曲第41番ハ長調 K.551「ジュピター」

ごあいさつ

本日は、「モーツァルト生誕250年記念 ザ・シンフォニエッタ合志市演奏会」にお越しいただき、誠にありがとうございます。また、今年3月には、「創立20周年記念 第20回演奏会」を満員のお客様のもと開催することができましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、私どもは20年前の創立時から一貫して、「小編成を活かした演奏」「高い目標と納得いく練習」にこだわって活動してきました。時にはロマン派や近代の曲に挑戦することもあります。やはり原点は古典派の音楽です。そして今年「モーツァルト・イヤー」。この一年間はとことんモーツァルトにこだわるとともに、「オール・モーツァルト・プログラム」を組みました。とはいえ、モーツァルトの音楽は特に演奏が難しいとされています。一見シンプルな楽譜に、神がかり的に美しい音楽が秘められているからです。ためらいもあつた私たちを後押しし、ご支援をいただいた「熊本モーツァルト協会」の皆様にも感謝申し上げます。

本日の指揮者、小野富士氏は、NHK交響楽団、モルゴーア・クアルテットのヴィオラ奏者として活躍される傍ら、アマチュア演奏家のご指導にもたいへん熱心な素晴らしい音楽家です。ザ・シンフォニエッタも10年以上前から度々ご指導いただくとともに、ソリストとしてもお世話になっています。

ピアニストの吉田秀晃氏は、地元熊本を拠点に精力的に演奏活動をなされる傍ら、大学等で若手の指導にも力を入れていらっしゃいます。本日の演奏会で吉田氏の魅力が十分に発揮されることを確信いたしております。

それでは皆様、モーツァルトの音楽を最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

2006年11月19日

ザ・シンフォニエッタ 代表 歳田 和彦

Profile



指揮 小野 富士

Hisashi Ono

1955年福島市生まれ。
'81年東京芸術大学音楽学部器楽科ヴィオラ専攻卒業。
'81年～'85年東京フィルハーモニー交響楽団に副首席ヴィオラ奏者として在籍。
'86年、第21回東京国際音楽コンクール弦楽四重奏部門で“斎藤秀雄賞”受賞。
'87年NHK交響楽団入団。同年10月から同楽団フォアシュペーラー。
'92年、“モルゴーア・クアルテット”結成に参画。
'98年、モルゴーア・クアルテット・メンバーとして、第10回“村松賞”受賞。
2005年、単行本《おのふじびおらデラックス》を「レッスンの友社」から刊行。
2000年から2006年まで東京芸術大学非常勤講師を務めた。



ピアノ 吉田 秀晃

Hideaki Yoshida

1973年熊本市生まれ。
京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専修を首席にて卒業。同大学大学院音楽研究科器楽専攻修了。大久保美知子、吉川由三子、古川五巳、神西敦子の各氏に師事。
1996年、京都市立芸術大学芸術教育振興協会の奨学金によりドイツへ留学。国立プレーメン芸術大学にてクルト・サイベルト氏のもとで研鑽を積む。
第9回園田高弘賞ピアノ・コンクール準県知事賞。第5回「万里の長城杯」国際音楽コンクール(大阪)ではピアノ一般の部A第1位。第65回読売新人演奏会、第36回熊本県新人演奏会に出演。

ソロ・リサイタルのほか、ハンガリーのコダーイ弦楽四重奏団、マリンバ奏者の名倉誠人氏と共演。木下亜子氏との2台ピアノによるストラヴィンスキーの「春の祭典」の演奏に対して「バロックザール賞」が授与された。昨年、NHK美術館コンサートに出演し、その模様はFMで放送された。演奏活動と共に、後進の指導にも力を注ぐ。今年よりピアノ講師の集い「八樹会」の顧問として、公開レッスンや講座を開いている。

熊本大学教育学部非常勤講師。日本音楽表現学会、熊本日独協会会員。

【Official Web Site】 <http://www11.plala.or.jp/Y2P/>

管弦楽 ザ・シンフォニエッタ

The Sinfonietta

1986年に結成された小編成のアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心としながら、ロマン派、近代の曲も演奏している。

これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二氏、山下一史氏、岩村力氏、藤崎凡氏、ソリストでは安永徹氏(ベルリン・フィル・コンサートマスター)、O.ボルヴィツキー氏(元同Vc)、堀正文氏(N響コンサートマスター)、篠崎史紀氏(同)、小野富士氏(同Vla)、小林道夫氏(Cemb)、若林顕氏(Pf)などで、素晴らしい指導者・共演者に恵まれて充実した活動をしている。

1989年1月の第3回演奏会では、山下一史氏、安永徹氏、O.ボルヴィツキー氏との共演を果たし、超満員の聴衆にTV放送もなされ、大きな話題となった。2004年11月にはNHK-BS2「おーいニッポン熊本」に出演し、熊本城前で演奏が全国に生放送された。2006年3月、第20回の記念演奏会を開き、今後ますます充実した活動を目ざしている。

8～10ヶ月の間隔で演奏会を行っており、アマチュアでも、時間をかけひとつひとつの曲をじっくり丁寧に仕上げれば、充実した演奏ができるという信念で活動している。



曲目解説

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 K.527 モーツァルト

1786年の12月、モーツァルトのもとに突然プラハからの招待状が届きました。プラハでは歌劇「フィガロの結婚」が空前の大ヒットとなり、是非作曲家自身に指揮して欲しいとの要望でした。年明け早々にプラハに出かけたモーツァルトは、「フィガロ」の人気の高さを目の当たりにし、プラハ市民から熱狂的な歓迎を受けました。モーツァルトの指揮による「フィガロの結婚」の公演や、新しい交響曲の初演は圧倒的な成功を収めました。

更にプラハ劇場の支配人は、次のシーズンのための新作オペラの作曲をモーツァルトに委嘱しました。こうして出来上がったオペラが「ドン・ジョヴァンニ」にほかなりません。「ドン・ジョヴァンニ」とは、スペインの伝説的な女たらしドン・ファンの中で、17世紀から18世紀にかけて、小説や戯曲でも取り上げられています。ドン・ジョヴァンニの台本を書いたのは、「フィガロの結婚」の台本を担当したダ・ポンテで、自己の快樂のためにひたすら女性を誘惑し続けるドン・ファン像を創作しました。規制のモラルに捉われず、あくまで自己の欲求に忠実に行動する旺盛な生命力と決してめげない生き方には、悪者でありながら一種の美学が感じられ、大変魅力的でもあります。オペラは、1787年10月にプラハで初演され、熱狂的な喝采を受けました。

この序曲は、オペラの初演の2日前に、モーツァルトが眠気を振り払いながら、一晩で書き上げた逸話があります。演奏時間6分ほどの曲ながら、緊迫した序奏と快活なソナタ形式による主部でできています。アンダンテの序奏は、第2幕のクライマックスで、ドン・ジョヴァンニに殺された騎士長の石像が、女たらしに余念の無いドン・ジョヴァンニを懲らしめるために出現するときの音楽が使われています。不気味で、迫力のある悲劇的な音楽は、やがて一転して、明るく推進力のある主部アレグロとなります。ドン・ジョヴァンニの高笑いが聴こえるような、あつけらかんとした音楽です。

ピアノ協奏曲第20番ニ短調 K.466 モーツァルト

モーツァルトは30曲に及ぶクラヴィア(ピアノ)のための協奏曲を作曲しました。これは、モーツァルトの協奏曲の中で最も重要な地位を占め、まさに独壇場の世界です。クラヴィア協奏曲は彼以前にはハッハの編曲作品が存在するぐらいで、オリジナルなクラヴィアのための協奏曲は殆ど見当たりませんし、ましてや一人の作曲家の中でこれほどクラヴィア協奏曲が重要な意味をもつことはありませんでした。また、形式や構成原理についても、モーツァルトの協奏曲はバロック時代の書法から脱却して、後に続く作曲家の手本となる真の近代的な形態を完成させています。

モーツァルトのクラヴィア協奏曲の初期の作品7曲(第1～4、K.107の3曲)は、モーツァルトのオリジナルではなく、18世紀の中頃に活躍していた作曲家達のクラヴィアソナタを、協奏曲に仕立て直したものです。モーツァルトのオリジナルによる最初のクラヴィア協奏曲は、第5番ニ長調のK.175で、交響曲第25番ト短調K.183の直後に作曲されています。1773年、モーツァルトが18歳の誕生日を迎える時期の作品で、早くからいろいろなジャンルに作品を残しているモーツァルトにしては意外に遅い出発と言えますが、それだけにこの協奏曲の完成度は、後に続くザルツブルグ時代の5曲の協奏曲に見劣りしない作品です。

(ウィーン時代のピアノ協奏曲)

1781年の夏、モーツァルトはザルツブルグを去ってウィーン定住を決意し、独立した音楽家としてコンサートを開き、ピアノの教師として自立した生活を送る事になりました。そしてモーツァルトの予約演奏会の目玉が、自らピアノを弾く協奏曲でした。ウィーン時代に書かれたピアノ協奏曲は15曲に及び、いずれも充実した作品ばかりです。1782年、モーツァルトは書簡で、ピアノ協奏曲のコンセプトとして「難しすぎもせず、易しすぎもせず、華麗で聴いていて快く、空虚に陥ることも無く自然で、識者も素人も満足できる親しみやすい作品」と語っています。

しかし、1785年に作曲された協奏曲第20番ニ短調K.466は、冒頭から従来の作品とは全く異なる世界が展開します。初めて短調で書かれたこの協奏曲の異様ともいえる陰鬱で悲劇的な感情表現は、この時代の常識をはるかに飛び越えています。ちなみにベートーヴェンはこの曲を高く評価して、しばしばコンサートで弾いています。ピアノ協奏曲の歴史において、この作品は近代的な協奏曲への決定的な転換を示すものとされています。

○ 第1楽章 アレグロ ニ短調 4/4拍子 協奏的ソナタ形式

ヴァイオリンとヴィオラのシンコペーションと低弦の上昇音からなる第1主題の切迫した異様な雰囲気、それが爆発するときの迫力は、ベートーヴェンの世界を予見させます。ピアノと管弦楽ががっぷりと組んで交響的な

充実した音楽が繰り広げられます。終結部のカデンツァ、今回吉田秀晃氏は、ベートーヴェンによるものを使用しています。

○ 第2楽章 ロマンズ 変ロ長調 2/2拍子 ロンド形式

ロンド形式をとる優しいロマンズですが、第2エピソードは嵐のように荒れ狂う、厳しい音楽となっています。ここでのピアノと木管楽器の掛け合いが醸し出す、暗く激しい響きに圧倒されます。それが徐々に静まって、ロマンスが美しく再現し、夢幻的な雰囲気の中に曲を閉じます。

○ 第3楽章 ロンド アレグロ アッサイ ニ短調 2/2拍子 ソナタ形式

暗い情熱的な主題がピアノによって弾かれ、管弦楽が激しく引き継ぎます。第2主題はヘ短調で現れ、そのあと木管楽器による流麗なメロディーが一時の明るさを齎しますが、展開部では一貫して激情的な気分によって支配されています。そして、ニ長調のコーダに至ってやっと明るさを取り戻して、それまでの暗雲を振り払うような陽気なエンディングとなります。コーダ直前に奏されるカデンツァは、アンドラーシュ・シフの作曲したものを弾いています。

交響曲第41番ハ長調 K.551「ジュピター」 モーツァルト

1788年の夏、モーツァルトは3つの交響曲を書いています。1788年6月26日に39番を、7月25日に40番を、そして8月10日に41番を完成させています。わずか2ヶ月足らずの短期間に集中的に作曲されたこれらの交響曲は、俗に「モーツァルトの3大交響曲」と呼ばれています。前作の「プラハ」とともにモーツァルトの交響曲の頂点に立つ傑作で、いずれも最高度の技法を駆使して作られています。その表現する世界は、全く異なる性格を持っています。モーツァルトの天才ぶりを示す最適例と言えるでしょう。しかしながら、これらの交響曲がどのような目的で作曲され、いつどこで演奏されたかについては、はっきりした記録がありません。ただ、これらの交響曲のパート譜の存在や、第40番の改訂版の存在は、生前に演奏されたことを物語っています。

モーツァルトの最後の交響曲は「ジュピター」との呼び名を持っています。ジュピターは、ギリシャの最高神ゼウスのことで、この交響曲の均整の取れた雄大な行まいや堂々たる威容は、この名にふさわしいといえます。どうやら名付け主は、あのハイドンをロンドンに連れ出して、12曲のロンドン交響曲を書かせた、興行師P. ザロモンだということです。また、この交響曲のフィナーレにはフーガの手法が取り入れられ、「終末フーガ付き」とも呼ばれています。この終楽章で発揮されるモーツァルトの対位法の手法の見事さは、あの大ハッハの再来を思わせます。

○ 第1楽章 アレグロ ヴィヴァーチェ ハ長調 4/4拍子 ソナタ形式

力強い主題で始まり、まことにジュピターの名に相応しい曲想です。流麗な第2主題の美しさ、リズムックなコーデッタの主題も一度聴いたら忘れられない魅力があります。展開部ではこのコーデッタの主題が大きく展開され、ついで第1主題が取り扱われて再現部に入ります。このくだりのどきどきするような進行が聴きものです。

○ 第2楽章 アンダンテカンタービレ ヘ長調 3/4拍子 ソナタ形式

癒しの音楽とはこのような曲を言うのでしょうか。神々しいまでの静けさ、明るさと物憂さ、悩ましい変化音、切々とした胸の訴え、耳を傾けるだけで、至福の安らぎを齎します。美しすぎて哀しいとはこのような音楽のことで、この世のものとは思えないくらいです。

○ 第3楽章 メヌエット アレグレット ハ長調 3/4拍子 三部形式

壮麗なメヌエットの主題は、天から舞い降りるような下降線のメロディーラインで歌い込まれます。どっしりと刻まれるリズム、堂々とした音の積み重ねが印象的です。素朴な雰囲気の中間部(トリオ)の後段で、フィナーレのフーガ主題を先取りした短調の音楽が聴けます。

○ 第4楽章 モルト アレグロ ハ長調 2/2拍子 ソナタ形式

フーガの手法が極限まで発揮されるソナタ形式の楽曲で、その壮麗さは古今無比です。曲は高潮に高潮を重ねてクライマックスを築いて終わります。この楽章の主題は、ドレファミの4つの音からなり、ジュピター動機と呼ばれています。このグレゴリオ聖歌に基づく動機は、モーツァルトにとって特別な意味があるようで、交響曲第1番や33番にも使われ、ほかにも10数例があるということです。

モーツァルトがこの3大交響曲を書いた1788年には、ハイドンはバリのオーケストラのために、交響曲第88番から92番を書いており、あとは1791年から1795年までの12曲のザロモン交響曲を残すのみでした。そして1800年には、ベートーヴェンが交響曲第1番を発表し、ウィーン古典派の交響曲は新しい飛躍に向けて旅立ちをするようになります。

熊本モーツァルト協会 橋本

Member

コンサートマスター

大宮 伸 二

第1ヴァイオリン

井手本 裕律子
浦 中 有 紀
河 野 真 理
定 永 明 子
瀬 畑 健 雄
多 賀 直 彦
東 家 容 子
富 奥 史 子

第2ヴァイオリン

大 宮 協 子
岡 本 侑 子
可 児 孝 英
清 永 育 美
清 永 健 介
多 賀 美 紀
武 智 久 子
益 田 久 美
松 本 晋 弥
山 口 祐 子

ヴィオラ

和 泉 希代子
磯 部 哲 也
太 田 由美子
田 代 典 子
中 澤 康 子
毎 床 一 寿

チェロ

坂 本 一 生
関 栄
瀬 畑 むつみ
東 家 隆 典
深 松 真 也
枡 本 幸 二
馬 原 ひろみ

コントラバス

竹 内 尚 志
歳 田 和 彦

フルート

泉 由貴子
中 澤 邦 男

オーボエ

橘 徹
松 本 聡 子
吉 田 千 草

クラリネット

※福 島 由 貴
府 高 明 子

ファゴット

柴 田 義 浩
星 出 和 裕

ホルン

伊 藤 友 美
川 崎 華 奈

トランペット

出 口 文 教
福 島 敏 和

ティンパニ

高 宗 邦 子

副指揮・トレーナー

山 本 俊 之

※は賛助出演

次回演奏会のお知らせ

第21回 ザ・シンフォニエッタ演奏会

と き: 2007年7月16日(月) (海の日)
14:00開場 14:30開演

と ころ: 熊本県立劇場コンサートホール

指揮・ヴィオラ独奏: 小野富士(NHK交響楽団)

曲 目: テレマン/ヴィオラ協奏曲ト長調

シヨスタコーヴィチ(バルチャイ編曲)/室内交響曲Op.83a
(原曲:弦楽四重奏曲第4番)

ベートーヴェン/交響曲第3番変ホ長調Op.55「英雄」

お帰りの交通案内

●合志市役所発、交通センター行

昼の部 15:08、15:38

※最終が17:36なので、夜の公演後のバスはありません。

●御代志駅までタクシーを利用する場合(約7分)

電車 御代志駅→藤崎宮駅行 毎時11分・41分発

19:11以降は(19:26)、19:56、(20:26)、(20:56)

※()は 北熊本駅止まり

バス 御代志駅→交通センター(熊本駅)行

昼が20分、夜30分間隔で22時頃まであります。